

山形県

<研究課題>

『個が生きる授業の創造』

～基礎・基本の定着や発展的な力の育成に結びつく評価と指導の工夫～

白鷹町立東中学校

(平成14～16年度指定)

<学校の所在地・児童生徒数>

山形県白鷹町立東中学校 生徒数326名

〒992-0832 山形県西置賜郡白鷹町

大字荒砥乙1158

電話：0238-85-5531

1 研究課題の設定理由

「学習意欲は、わかる・できる喜びで培われる」という共通認識に立ち、授業において評価と指導の一体化を中心とした個に応じた指導の工夫改善を図りながら、「基礎・基本を定着させる」「発展的な力をつける」ことを目標とし、本主題を設定した。

2 研究の特色及び概要

(1) 個が生きるための条件として考えたこと

①生徒の活動の場・時間を充分保障すること、②「わかった」という実感を生徒にもたせること、③「認められた・全体の役に立った」という思いを持たせることの3点を考えた。

(2) 平成16年度の研究の仮説

1. 評価を行い、その結果をもとにして個に応じた指導を行う。2. 生徒一人一人の実態に即し、個に応じた指導に結びつく教材を開発・工夫する。3. 少人数授業やTT授業等の授業形態で、個に応じた指導をきめ細かに行う。

(3) 仮説1「評価活動を生かした学習展開」についての実践例

①小テスト後の一斉補充学習（2年国語）

これまでのNRTの結果を見ると、文法の中でも特に動詞の活用に関する理解が低かった。定期テストにおける結果でも、定着があまりよくない状況である。そこで、授業の中で小テストを行い、各自の自主学習と定着のよくない問題の一斉補充指導を行い、その後で単元テストを行うという形をとった。その結果は次の通りである。

	終止形 に直す	活用形 を答える	活用し て入れ る	活用の 種類を 答える	活用表 を完成 させる	他動詞 自動詞 の区別	可能動 詞の区 別	形式動 詞の区 別	音便を 答える
小テスト	84%	62%	90%	56%	54%	80%	91%	52%	96%
単元テスト	90%	82%	93%	83%	83%	86%	92%	86%	96%

ほとんどの項目で小テスト後よりも単元テスト後の正答率が高くなり、一斉補充指導の効果があつたことがわかった。

②自己評価を次の活動に生かす（2年技術）

次に示すようなチェック表を用いて本時の作業の自己評価を行った。

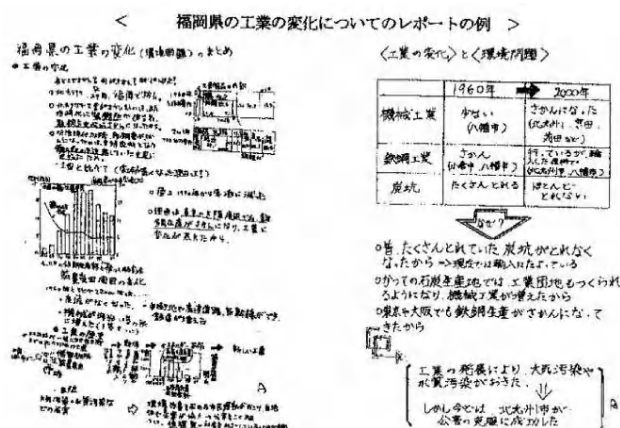


さらに、チェック表の作業のポイントを元に次時の作業の意識すべきところを認識するようなまとめを行った。これらの工夫の結果、生徒達は自分が作業のポイントを頭に入れながら活動を進めることができるようになり、部品加工の正確性が増すとともに安全面に留意した活動が展開された。

(4) 仮説2「個に応じた教材の開発・工夫」についての実践例

○生徒個々の工夫を生かしたまとめのレポート作成（１年社会）

１年地理の「さまざまな地域の調査～都道府県を調べよう～」で、山形県、東京都について学習した後、大単元末の「福岡県の工業の変化」について、自分で資料を探し、レポートにまとめる活動を取り入れた。前時まで身につけた学び方を生かしながら、グラフ化、箇条書き、白地図、図式化といった工夫をしながら、主体的にレポート作成を行う姿が見られた。



（４）仮説３「個に応じた指導体制の工夫」についての実践例

①コース制授業（３年数学）

３年の数学科では、年間を通して１クラスをＡ（ゆっくりコース）・Ｂ（普通コース）の２コースに分ける「コース制授業」（習熟度別授業）を実施し、指導体制の工夫を行っている。コース分けは生徒の希望で行った。Ｂ→Ａコースへの移動に関しては教師側からアドバイスを行わないように配慮した。２つのコースで課題や学習活動に違いをもたせ、指導の工夫をおこなった。

②少人数授業（３年英語）

３年の英語科では、１クラスの生徒数を半分に減らした少人数授業を基本としながら、Ｔ→Ｔ授業、単元末（単元テスト後）のコース制授業（補充コースと発展コース）を組み合わせた指導体制の工夫を行っている。これらの指導の結

果、生徒の力が格段に向上した。

３ 研究の成果と今後の課題

（１）各教科で、生徒の現在の力を評価し、その補充を行ったり、学習のポイントを示すなどの「評価を生かした指導」に力を入れてきた。この評価は生徒に学習内容の定着度を意識させるとともに、教師側にも指導の反省・改善点を意識させるという点で相当の効果がみられた。

（２）自己評価を活用する実践もいくつか行ったが、生徒が自己評価の規準を明確に把握できる場合や自己評価がその後の生徒の活動に生きていく場面などで特に効果があるとわかった。

（３）２年と３年の数学科においてコース制（習熟度別）授業を実施し、Ａ（ゆっくり）コース・Ｂ（普通進度）コースそれぞれの生徒が自分のペースにあった学習が進められた。特に３年生は基礎的な内容が定着していない生徒が各クラスに３・４名程度いたが、Ａコースで学習を進めたことにより定期テストの得点を大幅に伸ばすことができた。３年生では定期テストの結果を受けて学年半ばにコースの変更を行った生徒が各クラス数名ずつみられ、自分の力に応じた学習を進めようとする態度が育ってきている。

（４）３年英語科において、各クラスの生徒を均等に半数ずつにした形態で、少人数授業を実施した。その結果、生徒に表現させる場面が増えるとともに、一斉指導後の個別指導で個々の生徒に指導する時間がより確保できるようになった。また単元末に単元テストを行い、その結果をもとにして生徒が補充学習コースと発展学習コースを選択するコース制学習も試みた。それにより、定期テストや実力テストの平均点が向上してきている。授業形態の工夫により学習内容の定着率が高まり、生徒の自信に結びついている。

（５）数学科や英語科を中心としたコース制授業、少人数授業の中での学習形態の一層の工夫については、今後の課題として考えていきたい。